

ハーバートにおける愛の意味

船 木 満 洲 夫

(1)

ジョージ・ハーバートの詩を読んでいると、神との緊張した関係、神との一体意識（いずれも humility を含む）に印象づけられる。この詩人の愛の意味を探るにあたって、最初に私たちの視点にこれらをおさえておきたいのは、彼の愛の本質に深く結びついていると思われるからである。

神との緊張した関係については、あの自伝的な「苦悩 (I)」*Affliction* (I) や激越な反抗調の「首輪」*The Collar* 等のほかに、次に引用する「裁き(I)」*Justice* (I) や「苦くて甘い」*Bitter-sweet* のような短詩からも知ることができよう。

I cannot skill of these thy wayes.
Lord, thou didst make me, yet thou woundest me;
Lord, thou dost wound me, yet thou dost relieve me:
Lord, thou relievest, yet I die by thee:
Lord, thou dost kill me, yet thou dost reprieve me.
But when I mark my life and praise,
Thy justice me most fitly payes:
For, I do praise thee, yet I praise thee not:
My prayers mean thee, yet my prayers stray:
I would do well, yet sinne the hand hath got:
My soul doth love thee, yet it loves delay.
I cannot skill of these my wayes.

〔このようなあなたのやり方が私には納得できません／主よ、あ

あなたは私を作られた、でも私を傷つけられる／主よ、あなたは私を傷つけられる、でも私を救ってくださる／主よ、あなたは救ってくださる、でも私はあなたによって死にます／主よ、あなたは私を殺してしまわれる、でも私の刑の執行を延期なさる／だが私の生と賛美のさまをよく見ると／あなたの裁きは私に実にびったり報いています／というのは、私はあなたを賛美します、でも賛美はしません／私の祈りはあなたを目ざします、でもわきにそれてしまいます／善良にやろうと思いましたが、でも罪の方が勝ちました／私の魂はあなたを愛します、でも手間どるのを愛します／このような自分のやり方が私には納得できません]

Ah my deare angrie Lord,
Since thou dost love, yet strike;
Cast down, yet help afford;
Sure I will do the like.

I will complain, yet praise;
I will bewail, approve:
And all my sowre-sweet dayes
I will lament, and love.

[ああ、いとしく怒り易いわが主よ／あなたは愛し、しかも打ちたもう／投げ倒し、しかも助けたもう／だから私もぜひ同じことをします／私は不平を言い、しかもほめ称えます／嘆きながら、しかも是認します／こうしてつらく楽しい全生涯を／嘆き悲しみ、そして愛します]

こうした作品はキルケゴールの叙述を筆者に思い出させる。『あれか、これか』の終りの、「われわれは神に対して常に正しくない」の考察⁽¹⁾について、『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』に言及した個所がある。罪が宗教的実存にとっての決定的な表現だと考えるキルケゴールは、この考察は有限者と無限者の間の食いちがいを指摘したもの、神への靈感に燃えた最後の呼びか

け——「私にはあなたが理解できません、でも私はあなたを愛そうと思います、あなたは常に正しい、しかり、たとえあなたが私を愛そうとしないように私に思われても、それでも私はあなたを愛そうと思います」を表明したもので、霊的熱狂のうちに最後まで耐え通す勇氣によって、あの対立関係をいわばたな上げにする建徳（教化）的立場だと説明するのである。罪と最後の叫びの境地からこのように無限者と相対するのは、ハーバートの詩と共通するところがありはしないか。ハーバートの神との競合と逆説的表現にはアイロニーが感じられるが、これは自己卑下のかもし出すアイロニーであろう。神を前にしているという点では、詩人にとってこれほど真剣な姿勢はないにちがいない。神と対等のように神との相違を絶えず意識している。対立を対立として定着しながら、苦悩と罪の意識のもとに信仰の力が対立の和合を生み出している。神の怒りに疑問をはさみながら、その愛に価しない自分を問いたただすことになり、神の救いと愛に対する自身の側の賛美と愛の問題が前面に浮かぶ。神と絶対的に異なる人間の身では、賛美と愛が神との関りの極致であろうし、神との差異の確認が自己卑下によってなされ、その確認によってこそ愛の同一化が表現され得るのである。⁽³⁾ 上記の「苦くて甘い」が示すように、神の懲らしめに対してこちらの側の愛——‘lament’ と力強く結ばれた ‘love’——で応答する。つまり愛が最後の語なのである。

次に humility を伴う神との一体意識に関しては、ハーバートの後年になってきわ立つ「私はあなたのもの」(I am thine) と、死を自覚して強調する「神のすべての恵みの中で最も小さな恵みも受けるに足りぬ」(*Lesse then the least / Of Gods mercies*) の句に留意したい。Bodleian 詩稿に収められていて Williams 詩稿に載っていない詩は、ハーバートの比較的晩年の作だとする定説的推断を踏まえてのことである。前者は「雅歌」第2章16節に由来し、後者は「創世記」第32章10節（「エペソ書」第3章8節）に拠る。ユーモラスな「即妙の応答」*The Quip* では、内面の世俗的な誘惑を退けるのを神の代理返答にまかせ、最後に ‘I am thine’ の答えを依頼して自らを神の愛に委ねる。アイロニカルな「飛び道具」*Artillerie* では、ともに競い合う射撃手でありながら、ついには ‘I am thine’ と明言し、神と和平を結ぶのはかな

わぬことと、「私はただの限りある身だけれども、限りなくあなたのもの」(I am but finite, yet thine infinitely) と敬虔な愛をもって締めくくる。敬虔な愛、自由意志と恩寵の和合の表現は、「握手」*Clasping of hands* にさらに発展的に見られる。‘thine’ と ‘mine’ の入り組んだ言葉遊びの中で、主のものとなることによって自分がとりもどされること、主の犠牲によってすでにとりもどされたことを述べ(‘restore’を反復)、区別を超えた一体を望む祈願を次のようにまとめる——「おお、常に私のものでありたまえ！常に私をあなたのものとなしたまえ！／いやむしろ、あなたのものも私のものもなしにしたまえ！」(O be mine still! still make me thine! / Or rather make no Thine and Mine!) と。いずれの詩も神との差異を意識し、自らを神のものと方向づけながら現世の身の限界をのぞかせずにおかないところに、ハーバートの現実立脚の濃密度がうかがえようか。詩人にとっての ‘mine’ と ‘thine’ はどこまでも目標で彼の信仰にかかること、神にとっての ‘mine’ と ‘thine’ は成就された真理で詩人は神の愛を求めているのである。彼の意識の中での神との懸隔はそれを除きたいとの切望にもかかわらず、むしろその切望の強さの故におおうべくもない。

「銘」*The Posie* において、もともと彼に無縁ではない創案、比喩、機知を議論なしに退けて、‘*Lesse then the least / Of all thy (Gods) mercies*’を自らの銘として掲げる。ここにハーバートの詩がただの世俗的な言葉遊びでないこと、その詩がもつ神への humility の境位が究極的に確認される。この句は『聖堂』の序文「読者への出版者の言葉」(*The Printers to the Reader*)で、友人フェラー(Nicholas Ferrar)がハーバート自身のモットーとして結びに使っているし、ウォルトン(Izaak Walton)の伝えるのによれば、ハーバートは死の数週間前に『聖堂』の詩稿をフェラーに託する伝言にこの銘を用いている——「……私が主イエスのご意志に私の意志を服従させ得るようになる以前に、神と私の魂との間に生じた多くの霊的争闘の状況が、この詩集の中には見られるでしょう。主に仕えることで私は今は完全な自由を見出しています。彼にこの詩集を読んでもらいたいのです。それでもしこれが、気落ちした魂に利することがあると考えられるなら、どうか公表してください。そうでな

ければ、焼き捨ててください。私とこの詩集は、神の恵みの中で最も小さな恵みも受けるに値しないものですから」(……*he shall find in it a picture of the many spiritual Conflicts that have past betwixt God and my Soul, before I could subject mine to the will of Jesus my Master: in whose service I have now found perfect freedom; desire him to read it: and then, if he can think it may turn to the advantage of any dejected poor Soul, let it be made publick: if not, let him burn it: for I and it, are less than the least of God's mercies.*⁽⁴⁾) と。ウォルトンの言述にはおそらく粉飾があるであろうが、⁽⁵⁾この一卷の精神と合致することは確かだし、もし特に後半がハーバートのありのままの文面だとすると、神に仕える彼の魂は生涯の最後に至高の境地に達したのであろう。しかし彼が「完全な自由」を得ていたか、このように得ていると明言したかどうかは、その自己否定の立場からして疑問とせざるを得ない。ハーバートにとって現実には、そうすっきりふり切れるほどの関りではなかったように思えるのである。

(2)

ハーバートの愛の基本は神との直接の関係にあり、まず何よりもキリストの受難 (passion) が核心的な意味をもつ。キリストの愛と勝ちを競おうと意気こんでも、この受難のことに及ぶと、無言の畏怖とともにあとに退かざるを得ない (「感謝」 *The Thanksgiving*)。この世の苦しみは人間の罪には必須であり、救い主の血が聖餐において愛を告知するのがキリスト信仰である (「苦悶」 *The Agonie*)。キリストの受難を思って、「……私の全生涯の一刻ごとに／悲しみを一つ味わわせたまえ／あなたの苦しみが全身を駆けめぐり／私の太陽となりますように」(……*let each houre / Of my whole life one grief devoure; / That thy distresse through all may runne, / And be my sunne*) と願い、苦悩を彼自身の全宇宙となるべきものと受けとめ (「聖金曜日」 *Good Friday*)、アダムの墮落と地上の苦悩を天への飛翔を助長する再生の機縁と考える (「復活祭の翼」 *Easter-wings*)。とは言うものの、罪から脱する

ことはできず神への反抗心を吐露せざるを得ない——「反逆の気持ちでいっぱい、私は死んでしまいたい／あるいはとっ組み合うか旅に出るかしたい／それともあなたが私と関りがあることを否認してしまいたい」(Full of rebellion, I would die, / Or fight, or travell, or denie / That thou hast ought to do with me) (「本性」*Nature*)。そして個人的な苦悩の体験の果てに、「ああ、いとしい神よ！私がすっかり忘れられようとも／私が心からあなたを愛するのでなければ、私にあなたを愛させないでください」(Ah my deare God! though I am clean forgot, / Let me not love thee, if I love thee not) と呼びかけて、主体性をもった神への愛を逆説的に自覚する(「苦悩」(I), 前出)。罪と立ち向かうために聖餐の恩寵、主の犠牲の血に頼る(「聖餐式」*The H. Communion*)。以上からでも、人間の罪・苦しみと神の犠牲・愛がハーバートの内面に循環するのが読みとれようか。これは彼の詩の精神の型または構図として持続すると言ってよいと思う。

祈りにおいてキルケゴールは言う——「あなたを忘れて、どうして愛について正しく語ることができましょう。愛の何であるかを顯示したもうたあなた、すべての人を救うために自分自身を投げうちたもう、われらの救い主にして贖い主なるあなたを忘れて！」。⁽⁶⁾ 真実の愛のためにハーバートは一組みのソネット「愛(I) (III) *Love* (I) (III) で、世俗的な恋愛詩を激しく非難して神に祈願する。「不滅の愛」(Immortall Love)の栄光の名が塵に投じられて、「この世の愛」(mortall love)が創意と組んで心と頭を占有し、機知と美が互に通じ合って世俗の恋について書き綴るばかりだと「愛(I)」は嘆く。「愛(III)」では次のように不滅の炎に乞い求める。

And kindle in our hearts such true desires,
As may consume our lusts, and make thee way.

〔そして私たちの欲望を焼き尽くして、あなたに通じるような／
真実の願望を私たちの心に点じたまえ〕

神の賛美のために神のものをあるべき状態にもどすことを期するのだが、真実の愛を燃え立たせて虚偽の愛を焼き尽くすという方式が、ハーバートの平明な

すぐれた詩の根底をなしていることが多く、すぐ次に言及の作品も例外ではない。このような時間と永遠の関係は、最高の苦しみを伴うことを前提としてのみ、その至福について語り得るものでなければならない。

「気性 (I)」または「調節 (I)」*The Temper (I)* が最後に、自分が神の手中にあることを確認して、「あなたの力と愛、私の愛と信頼で／一つの場所があらゆる場所になるのです」(Thy power and love, my love and trust / Make one place ev'ry where) と終わるとき、時空を超えた相互の愛の一体によって平衡を得るのが、ハーバートの基調方向であることが改めて理解される。神のもとに赴くためにその愛を知るすべを教えてくださいと乞い(「早禱」*Mattens*)、愛の神であり愛そのものである神の愛の中に憩うことを語るのも(「晩禱」*Even-song*)、そしてまた肉体を離れて神の中を動き、ともに快く生きかつ愛し合うことを歌い(「教会音楽」*Church-musick*)、教会の床全体を結び固めるセメントのように、人間の心が愛(Love)と同胞愛(Charitie)で一つになるよう説くのも(「教会の床」*The Church-floore*)、その方向に沿うものであることは明らかであろう。愛と同胞愛が同一で、ともにキリストに由来すること⁽⁸⁾は「愛—喜び」*Love-joy* からかも知れるし、さらには「神を愛し、あなたの隣りびとを愛せよ。目を覚まして祈れ／人からしてもらいたいと思うように人にもせよ」(*Love God, and love your neighbour. Watch and pray. / Do as ye would be done unto.*) と、「マタイ伝」からの短縮引用でキリストの教えの根本に触れる(「神学」*Divinitie*)。それにしてもハーバートの詩では、隣人愛よりも神の愛、隣人との関係よりも神との関係が大きな比重を占めるし、神の愛と同胞愛とが一つであることが、キリスト教の言わずもがなの教義だとしても、神から同胞への愛の流れが意外と目につかないのはどうしたことか。おそらくはそれほど詩人が自らの内面に沈潜していることを意味するであろうか。実際の聖職者としての活動と詩活動とは別だということで説明がつくものではあるまい。

ハーバートは詩作のあいだ、神と最も近づいて創造力に与るのであり(「本質」*The Quidditie*)、祈りが神の耳にとどかないと心も詩もくずれ、神の寵愛と心が和合すれば調べがととのうのである(「拒絶」*Deniall*)。聖書のキ

リストの愛のみを写しとるべきこと（「ヨルダン川 Ⅲ」 *Jordan* Ⅲ），自分自身のためと，この世の生きものの代表として賛美の歌をよむこと（「摂理」 *Providence*）を詩人はわきまえている。罪の勢いのために神の愛が後退を余儀なくされている状況を見るにつけ，最後の審判の日にそれが引き返してくることを念じ（「衰退」 *Decay*），人間の愚行を柔和な鳩の翼でおおう神の愛に驚嘆する（「悲惨」 *Miserie*），それは「計り知れぬ愛」（unmeasurable love）で（「祈り Ⅲ」 *Prayer* Ⅲ），その神の死と血が示したのは「不思議な愛」（a strange love）であったのだ（「従順」 *Obedience*）。こうした超越的な愛は人間の愛にも通うのでなければならぬ。「無限なること，汲み尽くし得ないこと，測り知れないこと」が愛のエLEMENTであると考えるキルケゴールは，「だからもし君が愛を保持しようとするならば，愛が無限性によって自由と生命にとらえられ，絶えずそのELEMENTの中にあるように注意すべきである」と言う。愛は決して自分自身にかかずらってはならぬのであり，前述のように肉体を離れて神の中にあることを望むハーバートは，これを認識していたにちがいない。しかし土くれの肉体には天上の生氣と愛はあまりに遠い。詩人が「主よ，あなたの贈りものを清めてください，変わらぬ才知で／ただあなたの方を見えますように／見るだけです。あなたを愛することなど，だれに／どの天使に適いましょうか？」（Lord, cleare thy gift, that with a constant wit / I may but look towards thee: / *Look* onely; for to *love* thee, who can be, / What angel fit?）とへりくだるとき（「気うつ」 *Dulnesse*），この作品の無気力な精神状態は何を物語るであろうか。個人の有限性にどっぷりつかっているようでも，世の恋人とはちがった神への求愛には内面の出口が開いているのであり，詩人が神秘主義に陥ることなく，humilityをもって醒めた眼で‘look’し‘love’しようとする姿勢には確かなものが感じられる。

（ 3 ）

アレゴリー詩「知られざる愛」 *Love unknown* を吟味するにあたり，罪からの清めを祈願する「詩篇」第51篇から，「神よ，私のために清い心をつく

り、私のうちに新しい、正しい霊を与えてください」(Create in me a clean heart, O God; and renew a right spirit within me——10節)をまず引いておきたいのは、恐ろしく風変わりなこの作品のねらいに合致する聖句だからである。コウルリッジが『文学評伝』(*Biographia Literaria*)第19章で、「最も奇異な思想を最も精確な自然な言葉で伝える」(conveying the most fantastic thoughts in the most correct and natural language)その例として、この全詩を引用していることは周知の通り。気落ちした人生行路をふり返る点では「苦悩(I)」(前出)や「遍歴」*The Pilgrimage*を想起させるが、自伝的次元を超えた奥にこの詩の本領があろうし、むしろ「あがない」*Redemption*と「愛(Ⅳ)」(後述)とを結ぶ重要な位置を占める寓話詩と見なすのがよからう。丹念な委細の叙述、愚痴をこぼす話者と親友として応じる聞き手との対話形式が物語るのは何であろうか。卒直に切り出す話者は玄妙な内容を含める。

A Lord I had,
And have, of whom some grounds, which may improve,
I hold for two lives, and both lives in me.
To him I brought a dish of fruit one day,
And in the middle plac'd my heart.

[ぼくには一人の主人がいたし／今もいるのだが、その土地を、
さらに値うちが出るものと当てこんで／二代の期間、ぼくの現世
と来世の両期間、借り受けている／この主人のところへぼくはある日、鉢に盛った果物を持参し、／その真ん中にぼくの心をおいて
おいた]

話者と友人との関係は、つづく召使に関する説明(II. 9—11)からすれば、話者自身との関係と同じく親密以上のもの、つまり内面の客観化の形式である(なお当該説明には、神の召使のように神意と一つになるべきことが暗示されているか)。第一の挿話にしか登場しない召使同様に友人は主人の代理役と解せようし、第二から第三の挿話へと背後に姿を隠していく主人の代りに、友

人の役割が増大するのである。贈りものの果物鉢の真ん中に自分の心をおいたのは、敬虔な心づくしの表示であろうが、「召使は直ちに／果物はほったらかして、ぼくの心だけをつかみとり／それを泉の中へほうりこんだ。すると／大きな岩の／脇腹から噴き出した血潮が降ってきたのだ」(The servant instantly / Quitting the fruit, seiz'd on my heart alone, / And threw it in a font, wherein did fall / A stream of blood, which issu'd from the side / Of a great rock) と、ただ心のみが問題とされる。モーセによって予表された岩はキリストを指す。その血潮に話者の心が浸されて洗われ、涙が出るほど絞られるのは再生のための洗礼を意味する。つづいて話す出来事もそうだが、話者のもくろみは常に挫折し常に苦痛を味わわされて、そこにアイロニーがただよう。友人が「君の心は汚れていたのだろう」(*Your heart was foul, I fear*)と明察すると、彼はその真実を直ちに認めるけれども、それだけ反省を深めるふうではなく、日常生活の平面の自分の話をさらにつづけるばかりだ。真実を肯定しながら内面化しようとしなない。

次のエピソードも恐怖の光景を繰り広げる。

……I saw a large
And spacious furnace flaming, and thereon
A boiling caldron, round about whose verge
Was in great letters set *AFFLICTION*.
The greatnesse shew'd the owner.

[……巨大な広々とした炉が／炎を上げて燃えているのが見えた。その上には／煮え立つ大釜がかかり、そのへりのまわりには／大きな文字で「苦悩」と記されていた／釜の大きさがその持ち主を示していた]

類似の明白な詩「あがない」(前出)では、「長らくある豊かな主人の小作人をしていたが」(Having been tenant long to a rich Lord)で始まり、「その高貴な生まれを知っていたので」(knowing his great birth)の句が見え、背後の主役キリストの死が主題であったのに対して、今度は背後の愛の

仕打ちを受ける話者の内奥に専ら照明が当てられる。苦悩の釜、つまり苦しみによる浄化については旧約に典拠があるようだ。⁰¹ 形の上の大きさにのみ印象づけられる話者にその用途が理解できるはずはなく、主人の機嫌とりに自分の羊舎に生けにえをとりに行く。しかし話者の心は煮えたぎる釜の中へほうりこまれる結果になり、⁰² またも道理をわきまぬ自らの無知を暴露し、「君の心は硬くなっていたのだろう」(*Your heart was hard, I fear*) と言う友人の正しさを認める。心の硬さは詩「恵み」(*Grace*) に明らかなように、罪による愛の欠如を意味する。話者はこれまでに、内面の硬さをほぐすために、聖餐台で受けた神聖な血でしばしば洗ったことまで語るが、苦悩が関る内面の心情にはほとんど関心がない。大釜から脱け出ると家の寝床へ急ぎ、すべての罪過を眠って忘れようとする。

計るのは人であるが、処置をつけるのは神である、とはトマス・ア・ケンピスの言葉である。⁰³ 寝床にはとげ、思考のとげが詰めこまれてあった。友人から「君の心は純くなっていたのだろう」(*Your heart was dull, I fear*) と告げられると、⁰⁴ またもや ‘indeed’ と同意するほかない。三度の同意は信仰上の大事な内容を含む。前述の罪の容認、聖餐台での洗礼につづいて、ここでは心を伴わぬ祈り、主のあがないのことが語られる。話者にもキリスト教の認識と経験が形の上ではあるのであり、それだけに彼の愚痴る苦しみの役立たなさ、苦しみの不可欠性が引き立つと言えようか。話し相手の解説者はこうまとめる――

Truly, Friend,

*For ought I heare, your Master shows to you
More favour then you wot of. Mark the end.
The Font did onely, what was old, renew:
The Caldron suppld, what was grown too hard:
The Thorns did quicken, what was grown too dull:
All did but strive to mend, what you had marr'd.
Wherefore be cheer'd, and praise him to the full
Each day, each houre, each moment of the week,
Who fain would have you be new, tender, quick.*

「全く、友よ／ぼくの聞く限り、ご主人は君の知るより以上の好意を／君に対して示しておられる。結果をよくごらん／泉はただ、古くなったものを一新し／大釜は硬くなり過ぎたものをほぐし／とげは鈍くなり過ぎたものを生かし／すべては君が損なったものを直そうと、ひとえに骨折ったのだ／だから元気を出して、そのお方を毎日、毎時、絶えることなく／心ゆくまでほめ称えるのだ／そのお方は君を新しく、柔らかく、生き生きとさせたいと切にお望みなのだ」

話者に欠けるのは神とのじかの内面の関係で、この関係に立たない限り彼は愚鈍のままにとどまらざるを得ない。神の愛は苛酷な苦しみを強いるのであり、苦しみと見えることが実は恩寵なのである。読者は隠れた真実を指摘する友人の解説を承認するようにしむけられる。ところで話者によって、内面の日常性が普遍の型にまで寓話化されていると言えるだろう。ハーバートにとって自分と距離をおくことは、とるに足りない日常の出来事との関りを避ける意味をもつだろうし、また悲惨さを強調する話者のこっけいさが、背後の神の愛の存在を逆に引き立たせる点では、自己戯画化は成功している。ただこの作品の対話形式では、日常性と宗教性の分極化が過度の教訓色をもたらしてはいないか。末尾の教化的要約を余儀なくさせる運びが、詩を損う結果を生んではないか。もう一つつけ加えたいのは、詩人がここに現実の中の、あるいは現実の側に引きこんだ地獄図を描き出し、それが必ずしも成功していないと思われる点である。このことは彼がこの世の地面から足を離さないこと、同時に地獄の責め苦よりも天上の至福の方に向いた詩人であることを示すものではなからうか。「知られざる愛」が求めてやまぬ現世の清い心の者に、その整合性を表わすという方向づけは見逃せない要点であるが。

(4)

ハーバートの愛は神との相互の働きかけと相互の応答に特色がある。万物の

目的性、神の摂理を理解し得る一個の人間としてそれをほめ称える詩人は、神の愛と動きを承認して万物の意志が神の意志にはかならぬことを歌う（「摂理」前出、ll. 29—32）。しかし決定論に陥ることはなく、自分の罪を容赦してくれた慈悲深い神を同じく感謝をもってほめ称えるとき、自分が神を愛し愛のとだえることのないう神を動かす立場を述べる（「賛美Ⅲ」 *Praise* (Ⅲ), ll. 1—4）。言及した両詩の ‘love’ と ‘move’ に注意したい。次に相互の応答についてであるが、神意への乱れた反抗の末に ‘*Child!*’ と呼ぶ声が聞こえたように思い、それに応じて詩人は ‘*My Lord*’ と言い（「首輪」前出、ll. 35—36）、こちらの ‘*O, could I love!*’ には神が ‘*Loved*’ と答えるなど（「真実の賛美歌」 *A true Hymne*, ll. 19—20）、応答が詩を完結させる例にその愛のあり方が看取できるように思う。

「教会」の、そして『聖堂』の最後を飾る「愛Ⅳ」 *Love* (Ⅳ) は、聖餐を受ける客の立場から神との対話を簡明な言葉で戯曲化している。ハーバートのキリスト教信仰の極致の作品。

Love bade me welcome: yet my soul drew back,
 Guiltie of dust and sinne.
But quick-ey'd Love, observing me grow slack
 From my first entrance in,
Drew nearer to me, sweetly questioning,
 If I lack'd any thing.

A guest, I answer'd, worthy to be here :
 Love said, You shall be he.
I the unkinde, ungratefull? Ah my deare,
 I cannot look on thee.
Love took my hand, and smiling did reply,
 Who made the eyes but I?

Truth Lord, but I have marr'd them: let my shame
 Go where it doth deserve.

And know you not, says Love, who bore the blame?
 My deare, then I will serve.
 You must sit down, says Love, and taste my meat :
 So I did sit and eat.

〔愛は私によろこそと言われた。だが私の魂はしりごみした／塵と罪とに心やまして／しかし目ざとい愛は、私が最初入ったときから／ぐずぐずするのを見てとって／私のそば近く寄ると、やさしくきかれた／何か足りないものでもあるのかと／この場所にふさわしい客が、と私は答えた／愛は言われた、君がそれなのだ／この薄情な恩知らずの私が、ですか？ ああ／私はあなたを見ることもできません／愛は私の手を取り、微笑んで答えられた／君の眼は私以外のだれが作ったというのか？／その通りです、主よ、しかし私はそれを傷めてしまいました。私の恥を／似つかわしいところへ行かせてください／君は知らないのか、と愛は言われる、だれがその責めを負ったかを？／ああ、それでは私が給仕をします／君は席について、と愛は言われる、そして私の食事を味わうのだ／そこで私は坐って食べた〕

しばしば指摘されるように ‘contest in courtesy’ の形式をとっているが、創造主で贖い主の厳然たる主人と、へりくだった自己否定の立場の客とでは、世俗的な枠組みにおさまらないことは明白だ。典拠に関しては、それぞれ僕（しもべ）の目覚めと長たる者の謙虚さの見地から主人の給仕に言及する、「ルカ伝」第12章37節と第22章27節との関連が濃い。競合の中で心の働きを描き出しているのはさすがにハーバートだ（性的なニュアンスを指摘する向きもあるが⁹⁹、それにかかずらう必要はなかろう）。この内面の物語は（最初の行の ‘my soul’ に注意）、最後に気持ちの抵抗が愛によって克服されて、従順に主人の給仕の聖餐を受けるまで（最終行には平明な単音節語が並ぶ）、意のままにレトリックを駆使している、いや使いきっていると言えよだろうか。詩人の信仰を少しのむだもなく定着した作品、自らの魂を神に委ねれば神に受け入れられ

るという、ハーバートの‘surrender’の主題の頂点に位置する作品であることは疑いない。さまざまな解釈がなされているが、天国の出来事というよりはこの世とあの世との関係を扱っている⁶⁷。愛をそっくり贈りものとして受納するのは不本意な心情も出ていようし、主人の言動から愛の種々の性質を推論して、そこにパウロの博愛の定義とともにハーバートの神の独自性を読みとることでもできよう。⁶⁸‘courtesy’の争いは結局何ら争いでなく、宗教改革時代の恩寵の不可抗性という教義を劇化したもの⁶⁹、神は人間を不完全なままに受け入れる、これが人と神との別なく愛の意味だとハーバートは正統的に信じている⁷⁰、またハーバートにとって神の愛は絶対的に無条件の愛で（宗教改革の神学と一致）、罪深い魂が引き下がると神はいっそう近づいてくる——とそれぞれの角度から解釈され得るのである。何はともあれこの詩は、ハーバートが常に神を純粋な関係可能な存在と考えていた、その成果であることが否めないであろう。神の愛が罪深い人間の内面に、過去でも未来でもなく現在に、天国ではなくこの世の枠組みの劇化された詩において成就されたのである。詩人の求愛の熱度を感じさせないではおかぬ。

愛は時間と永遠とを結びつける絆だとするキルケゴールは、また自己否定はキリスト教の本質的な形態だと言い、「今や法悦の神秘めいた意味においてすべてが与えられる。つまり神がすべてなのである。そして自己を否定する愛は、もはやいかなる私のものをももたないということによって神を獲得し、すべてを獲得したのである」と論じ、自己否定において内面の自己自身だけに限り、神との関係をもつことがすべてとなると考察する。キリスト者として罪の自覚をもちつづけ、つまづきの可能性を通過したハーバートが主イエス・キリストに向かって、「あなたは自ら道であり、生命でありたまいました。そしてあなたはただ従う者だけを求めたまいました」と話しかけても不自然ではあるまい⁷¹。自分を捨ててあとに従う者の行路はハーバートの詩のそれであったからだ。しかし従う者と賛美する者との間には無限のちがひがあるし、従う者とは賛美する対象となろうと努める者だとの異論が仮に出るとすれば⁷²、これはもはやハーバート詩の領域を超えた問題と言わなければならない。

ハーバートの作品の平明さ、寓話化、戯曲化は、彼の罪と愛の意識を方向づ

ける技法と一つのものである。神を前にして罪の自覚のために逃げ、愛を求めて近づこうとする。論議もすれば不平もこぼし競い合いも試みる。そこには実人生の心情の複雑さがのぞくし、神との関係に世俗を引きずっているとさえ思える。「愛(Ⅳ)」において神の愛は、この世の骨組みの物語の中で実現を見たのだった。自己を普遍的な人間にまで客体化しながら、苦しみを背負った一個の人間の存在は現実⁶⁹に持続される。真摯な詩人は神を賛美し神の愛の赦しを求める。もし背後の声が、罪の赦しに絶望するのが必須のことではないか、「神に迫ってゆくためには、神から遠く離れ去ってゆかなければならない」のではないかと語りかけるならば、実存のパラドックスよりも、そしてまた神秘主義よりも、humility と信仰をもって神に求愛し神を賛美する有限の身にとどまることが、ハーバートに与えられ課せられた道だったと応答するほかないであろう。同じように求めても、「おお主よ、あなたとあなたの家を思う熱心の炎をもって／私を焼いてください、その炎は食うことで癒すのですから」(And burne me O Lord, with a fiery zeale / Of thee and thy house, which doth in eating heale) と叫ぶジョン・ダンの激しさとは、かなり異質のようだ。



本稿のために使用したハーバート詩集は次の通り。

The Works of George Herbert, ed. F. E. Hutchinson, corr. ed. (Oxford, 1945)

註

- (1) キルケゴール『あれか、これか』(白水社『キルケゴール著作集』4, 浅井真男他訳, pp. 297—321)。
- (2) キルケゴール『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』(『著作集』8, 杉山好他訳, pp. 156—157)。
- (3) 同上(『著作集』9, p. 189)。
- (4) Izaak Walton, *The Life of Mr. George Herbert, 1670—George Herbert: The Critical Heritage*, ed. C. A. Patrides (Routledge & Kegan Paul, 1983), p. 127.
- (5) C. Bloch, *Spelling the Word: George Herbert and the Bible* (University

of California Press, 1985), pp. 19—20, 173.

- (6) キルケゴール『愛のわざ』（『著作集』15, 武藤一雄他訳, p. 10）。
- (7) A. Stein, *George Herbert's Lyrics* (John Hopkins Press, 1968), p. 3.
- (8) C. Bloch, *op. cit.*, p. 212.
- (9) キルケゴール『愛のわざ』（『著作集』15, p. 291）。
- (10) 「出エジプト記」第17章6節, 「コリント前書」第10章4節参照。
- (11) C. Bloch, *op. cit.*, pp. 212—213.
- (12) *Grace*, ll. 17—18. 'Sinne is still hammering my heart / Unto a hardnesse, void of love.'
- (13) トマス・ア・ケンピス『キリストのまねび』1:19:2 (岩波文庫, p. 42)。なお下記にも言及あり。

H. Vendler, *The Poetry of George Herbert* (Harvard University Press, 1975), p. 89.
- (14) *Ibid.*, pp. 91—92.
- (15) 「ルカ伝」第12章37節— 'Blessed *are* those servants, whom the lord when he cometh shall find watching: verily I say unto you, that he shall gird himself, and make them to sit down to meat, and will come forth and serve them.'
- 「ルカ伝」第22章27節— 'For whether *is* greater, he that sitteth at meat, or he that serveth? *is* not he that sitteth at meat? but I am among you as he that serveth.'
- (16) C. Bloch, *op. cit.*, pp. 110—111.
- (17) *Ibid.*, p. 100, notes.
- (18) A. Stein, *op. cit.*, p. 194.
- (19) H. Vendler, *op. cit.*, p. 275.
- (20) R. Strier, *Love Known: Theology and Experience in George Herbert's Poetry* (University of Chicago Press, 1983), p. 82.
- (21) C. Bloch, *op. cit.*, p. 108.
- (22) G. E. Veith, *Reformation Spirituality: The Religion of George Herbert* (Associated University Presses, 1985), p. 34 (148, 172, 264 etc.).
- (23) キルケゴール『愛のわざ』（『著作集』15, pp. 15, 97: 同16, p. 99 [引用部], pp. 238, 245, 277 etc.) 参照。
- (24) キルケゴール『キリスト教の修練』（『著作集』17, 杉山好訳, pp. 107, 146, 355 [引用部]) 参照。
- (25) 同上, p. 383.
- (26) キルケゴール『死に至る病』（『著作集』11, 松浪信三郎訳, p. 164）。
- (27) John Donne: *Holy Sonnets (Divine Meditations)* V, なお「詩篇」第69篇9節, 「ヨハネ伝」第2章17節と関連あり。

△ キルケゴールの引用は上記のように、便宜上『著作集』のページを示したが、本稿の訳文はその通りとは限らない。

△ 関連のある拙稿は次の通り。

「ハーバートの詩」，佛教大学「人文学論集」第20号，61年12月。

「ハーバートにおける祈りの意味」，佛教大学「人文学論集」第21号，62年12月。